

## 北斎とその彫師

エリス・ティニオス(リーズ大学名誉講師)

E-mail p.e.tinios@leeds.ac.uk

翻訳者：赤間 亮(立命館大学文学部教授)

### 要旨

この研究ノートは、『唐詩選画本 第六編』(天保4年刊)の板木に施された修訂を説明するため、飯島虚心『葛飾北斎伝』の中に収載されている、北斎から版元や彫師に送られた書簡を引証するものである。この修訂とは、数丁の挿絵の人物の目や鼻を、北斎様式の適応するよう板木に変更を加えたものであるが、それは、彫師がその重要性に気付かず、黙過していたものであった。

### abstract

This note cites letters from Hokusai to a publisher and a blockcutter preserved in Iijima Kyoshin's *Katsushika Hokusai den* 飯島虚心『葛飾北斎伝』(1893) to explain the changes made to the printing blocks of Part Six of *Tōshisen ehon* 『唐詩選画本 六篇』(1833). The changes made to the printing blocks brought the eyes and noses of some of the figures into conformity with Hokusai's style, which had been ignored by the blockcutter.

本稿は、江戸の書肆・小林新兵衛(嵩山房)から出版された『唐詩選画本』の北斎の挿絵にみられる修訂の意義について再評価を促すものである<sup>1)</sup>。江戸時代における「唐詩選」の出版は活発であり、様々な版を生んでいるが、『唐詩選画本』では、398の漢詩の原文と書下し文、邦訳が掲出されるとともに、各々の詩に日本語による注釈と挿絵が加えられている。小林新兵衛は、他に21種の『唐詩選』を蔵版目録の中で並べており、この蔵版目録や、あるいは他の出版書肆からも多数の版が入手可能であったという事実を鑑みれば、恐らく江戸時代を通じて『唐詩選』が漢詩集としては、最大のベストセラーの一つであったと位置づけることができるだろう<sup>2)</sup>。その内、ここで取上げる

『唐詩選画本』は、小林新兵衛の蔵版目録中では唯一の挿絵入本である。

本書は、全体として7編に分かれている。それぞれの編は、各冊30丁平均の薄い半紙本(227×158mm)5冊から成る。最初の4編は、天明8年(1788)から寛政5年(1793)の間に、矢継ぎ早に出版された。そして、40年の空白をおき、最後の3編は天保3年(1832)から天保7年(1836)に世に出た。

版元の小林新兵衛は、『唐詩選画本』の最初の5編については、それぞれ異なる絵師に担当させた<sup>3)</sup>。最後に、第六編と第七編、これは天保4年(1833)と天保7年(1836)にそれぞれ出版されたが、版元は北斎に挿絵を依頼することで、この企



図1 葛飾北斎「友を送る」『唐詩選画本』6編3冊、4丁裏5丁表。江戸、天保4年(1833)刊。表紙寸法227×158mm(立命館大学アート・リサーチセンター「古典籍閲覧ポータルデータベース」Ebiコレクション、Ebi0573) ※以下、番号のみを掲出



図2 葛飾北斎「友を送る」『唐詩選画本』6編3冊、4丁裏5丁表。江戸、天保4年(1833)刊。表紙寸法 227×158mm (Ebi0127)

画を華々しく終らせようとしたのである。北斎は、この時、この企画に参加する最も格の高い絵師であった。北斎の活動は1830年代(天保年間)に最盛期を迎えており、最も優れた版画のシリーズや多くの精巧な挿絵入本をこの期間に送り出しているからである。

また、版元は、北斎の作品のために最高の彫師を充てた。版元は、彫師として杉田金助と江川留吉を雇い、前者には、第六編の5冊全部と、第七編の1冊目と3冊目を、後者には2冊目と4冊目、5冊目というように、後半部分を担当させた。大きな企画で複数の彫師が仕事を分担し合うというのは珍しいことではなく、杉田と江川は共に、以前に北斎の挿絵本の板木を彫ったこともある。

ここに取り上げるのは、第六編3冊目の見開き1面(図1・2)、高適の詩と注釈の後にある挿絵である。詩は、高適が、マラリア熱の危険さえある多湿な閩中の地で、左遷されていく友を見送る内容である。

図1の左側、馬の鞍の先端をみて欲しい。板木が墨をはじいてしまい、印刷できていない小さな空白部分がある。こうした現象は、Ebiコレクションにある『唐詩選画本』第六編5冊全ての冊に出現している<sup>4)</sup>。このような印刷のムラは、この本に使われた各丁が、新しく彫り上げられたばかりの板木を使い、摺り始めてまだ間もない、極めて早い段階のものであることを示唆している。摺りがある程度回数を経ている場合は、板木への墨の載り具合が良くなり、全体が均等に摺り上げられる。

ここに掲出した挿絵の二つの印刷面は、同じ



図3 図1の部分

板木を使って摺られたものである。しかし、よく見ると、図2の左側の半丁を印刷するのに使われた板木は修訂されていることが判明する。版元小林新兵衛は、この丁や第六編に使われていたもう一枚の丁の修訂をしなければならなくなり、追加の出費を強いられた。図3・4と図6・7に当る2組の印刷面を比較して、目と鼻の部分の修訂前と後を確認して欲しい。

江戸時代の版元にとって、幕府当局によって不適切であると見なされた語句や表現を削除するため、あるいは、本文の間違いを修正するために、すでに製作されてしまった板木を修訂するのは、難しいことではなかった。また、長く使われ続けていた板木の場合に、摩滅や内容の更新のために、修訂されることもあった<sup>5)</sup>。

ここで、飯島虚心の『葛飾北斎伝』(明治26年<1893>)、最初の北斎の伝記)に収録されている2通の北斎書簡を取り上げたい。この書簡中に『画本唐詩選』が上梓されてまだそれほど時間が経っていない段階で、版元がこれらの板木を修正した理由を理解する鍵が存在する。

最初の手紙の受取人は、嵩山房、英大助、角丸屋甚助(衆星閣)の3名である。角丸屋は、長く北斎の挿絵本の製作に携ってきた。天保6年(1835)2月に書かれたこの書簡の中で、北斎は、“武者尽絵本”として言及している近刊予定の武者絵本の製作について、引き受けるための条件を表明している<sup>6)</sup>。

北斎は、この時代における江戸の最高の彫師として江川留吉を評価しており、自分の挿絵の彫



図4 図2の部分



りを江川に担当してもらいたいと版元に要求した。江川は『富嶽百景』の板木を彫ったが、そのすべての丁を北斎自らが詳細に検証した結果、江川の彫りと自分の意図が相違している箇所は、一つも見出すことができなかつたと北斎は記している。結果として『富嶽百景』は、ずば抜けた出来栄えの作品となった。

北斎は、他の彫師の仕事に関して、『北斎漫画』や『唐詩選画本』、その他については、「彫りの質は高いが、人物や顔、その他に(自分の様式としては)満足できない箇所がある」と述べている。そして、できるだけ高い品質の書物の製作を目指すことは、版元自身が関心を示すべきであると北斎は主張している。なぜならば、よい作品であればあるほど、商業的な見返りは、より大きくなるからである。

北斎の主張は、作品の最終的な品質は、結局、絵師、摺師と同様に、彫師に依存しているという事実を浮き彫りにしている。(ちなみに北斎は、10代の後半4年間、彫師として働いており、彫りの技術については理解していた。)

しかしながら、この書簡の重要性は、『唐詩選画本』の中で、人物の身体や顔のいくつかの彫りについて北斎が不満足であったことを記録しているところにある。

北斎は、天保7年1月17日付嵩山房宛書簡の別紙中で『唐詩選画本』のもう一人の彫師杉田金助に申入れたいとする内容を書いた。(訳者注: 原著者は当該書簡が『唐詩選画本』六編の出版された天保4年頃のものとしているが、修正した)。

彼は、この中ですぐさま目と鼻の彫りについて不満をぶちまける。その不満の内容を明確にするために、北斎は、目と鼻の描き方について、自分と歌川派のそれぞれの例を図示して説明している(図5、訳者注: 原文では、この部分を英訳しているが、本稿は、日本語のわかる読者を想定しているので、図版として掲載するに止める)。

ここで、描かれた2組の版面に戻る(図3・4、図6・7)。この事例においては、顔のみが改訂されていることに気付く。すなわち、目と鼻は北斎様

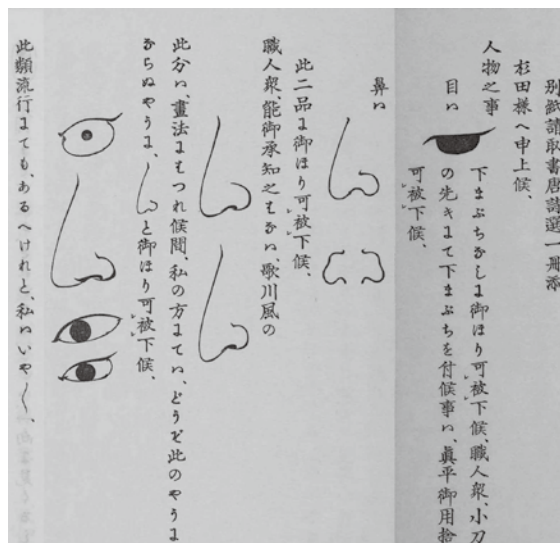


図5 彫師杉田金助への申入れを記した北斎の書簡。飯島虚心著『葛飾北斎伝』上巻。57丁裏から58丁裏を接合して提示。表紙寸法230×160mm (Ebi0824)



図6 従者の顔の部分拡大。葛飾北斎『唐詩選画本』6編5冊、8丁裏。江戸、天保4年(1833)刊。表紙寸法227×158mm (Ebi0573)



図7 従者の顔の部分拡大。葛飾北斎『唐詩選画本』6編5冊、8裏。江戸、天保4年(1833)刊。表紙寸法227×158mm (Ebi0127)

式に合致するように彫り替えられているのである。修正された人物の顔は、どちらも比較的大きく、正面から描かれた顔であり、それらは、画面構成上で重要な顔である。

北斎は、自身の作品の中の重要な要素においては、北斎が理想とする様式が再現されていないというような彫師の怠慢な仕事に対して、不快感を表したのである。我々は、このような状況証拠によって、北斎の意図から外れた様式で彫られた顔を版元が彫り替えさせて修訂したのは、実は絵師の直接の要求によるものだったということが理解できるのである。

こうした、内容の改修においては、版元は技術的には二つの選択肢を持っていた。一つは、新たに板木全体を彫り直すこと、もう一つは、板木の一部（あるいは複数箇所）を彫り替えることである。後者の技術は、日本語では、“入木”として知られている。

問題となったその箇所は、板木から削り取られた。そこに慎重に新たな木片が嵌め込まれ、その部分の表面は他の箇所と同じ高さにして綺麗に整えられ、そして正しい結果が刻まれた。2枚の挿絵の版面を詳細に観察してみると、顔の部分の修正にこの“入木”が施されていることを確認できる、非常に細かな継目が、板木と入木部分の境に残っているのである。

飯島伝記の中に、今回とりあげた書簡が保存されていたことに改めて感謝したい。自分が関わる挿絵本の製作に対して徹底的にこだわり、どのような仕上がりとなるべきかについて、北斎が明確な意見を持っていたことは、以前から知られていた。しかし、彼の意向に添えなかった版元や彫師の仕事に対して、北斎が強く意見を述べ、修訂を求めたという具体的な事例となる文献は、これまで明確には指摘されてこなかった。

上述の2通の書簡は、ここに示した版面の異同が、絵師の強い要請によって板木に対して加えられた修正の結果であると理解することを可能にする具体的な文献である。

北斎が杉田に宛てた2通目の文面は、杉田が

『唐詩選画本』の板木の彫刻時に見せた、北斎の様式に対するあからさまに無関心な態度への抵抗であったことが、今や明らかである。そして、書簡の最後に、北斎は、杉田が自分の作品に持込んだ歌川派様式の日や鼻への嫌悪を「此類流行にても、あるべけれど、私はいや／＼」と吐露しているのである。

『唐詩選画本』の挿絵の中に起きた、最も人目を引くであろう2点の瑕疵について、そのままにしようとする気は、北斎には一切なかった。すでに数十部、もしかすると数百部が、印刷製本され、販売に供されてしまっていたかもしれないが、版元は、北斎の要求を受入れたのである。

北斎と杉田は、これらの修訂が行なわれた後、和解したように見える。なぜなら、2年後に出た『唐詩選画本』第七編で、杉田は5冊の内、2冊の彫りを担当しているからである。その2冊に対して杉田は、北斎様式を誠実に守って彫り上げている。

#### 〔付記〕

本稿の執筆にあたって岩田秀行氏、武藤純子氏、松葉涼子氏、クリスティアン・ドュンケル氏から得た御助力に感謝申し上げます。

#### 〔注釈〕

- 1) 筆者は、“Understanding Japanese Woodblock-printed Illustrated Books: An Introduction to their History, Bibliography and Format”(鈴木淳、エリス・ティニオス、2013、Leiden and Boston、p.91)の中で、最初にこれら異同について指摘し、公表している。その後、ここで紹介する資料に遭遇し、異同の本当の重要性に気付かされた。なお、有木大輔は「唐詩選画本について 葛飾北斎と高井蘭山の寄与」(『アジア遊学』、vol. 116、2008.11、pp. 110-119)で、北斎が書簡の中で、自分が『唐詩選画本』に関ったということにふれているのを指摘しているが、ここで議論しているような板木の修正については、まったく注目していない。
- 2) 西山松之助、‘Edo Culture: Daily Life and Diversions in Urban Japan’, 1600-1868, Honolulu, 1997, p. 67. 参照。

- 3) 他の5人の絵師名と活動期(あるいは生没年)は以下のとおり。

橘石峰(1780年代) 初編・天明8年(1788)刊  
 鈴木芙蓉(1749-1816) 第二編・寛政2年(1790)刊  
 高田円乗(1790年頃) 第三編・寛政3年(1791)刊  
 北尾重政(1738-1820) 第四編・寛政5年(1793)刊  
 小松原翠溪(1780-1833) 第五編・天保3年(1832)刊

- 4) Ebiコレクションは、欧州にある日本の版本の個人コレクション。そこに含まれる全ての書籍は、立命館大学アート・リサーチセンター「古典籍データベース」でWEB上に公開されており、全ページ残らず閲覧することができる。

<http://www.dh-jac.net/db1/books/search.php>

- 5) 板木の改変の他の例としては、鈴木淳、エリス・ティニオス著の前掲書(pp. 98-101)とエリス・ティニオス‘Japanese Illustrated Erotic Books in the Context of Commercial Publishing, 1600-1868’ in *Japan Review*, XXVI, 2013, pp. 90-91. を参照のこと。

- 6) 「武者尽絵本」という題は、一般名であり、天保期(1830年代)の北斎のどの武者絵本を指しているかは不明。岩波文庫『葛飾北斎伝』(鈴木重三・校注、1999年)143頁注3参照のこと。

#### [訳者補記]

本稿は、2015年6月に発行された雑誌‘Print Quarterly’(vol. 32, no. 2, pp. 186-189)に英文で掲載された。本訳文の掲載にあたっては、当該雑誌編集部からの日本語訳での掲載許可を得ている。翻訳にあたっては、訳者注を入れて訂正した箇所がある。また、本稿の読者が日本語を理解する研究者であることを踏まえた変更、注の追記等を行っている。全体の論旨には変更はない。

本論文は、立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」の共同研究課題「海外日本美術品・工芸品のデジタル・アーカイブとコレクション研究」(代表John Carpenter)の研究活動に関連してまとめられたものである。本研究プロジェクトでは、欧米の日本古典籍コレクションのデジタル・アーカイブを進めており、『唐詩選画本』に関しては、本稿で言及されたEbiコレクションを始め11点が既にデジタル化され、アート・リサーチセンターの「古典籍ポータルデータベース」から閲覧できる状態になっている。このうち、一般公開されているものは4点である。また、本稿は、2017年に予定されている大英博物館の「北斎」展と同時進行で進め

られる北斎アーカイブとも連動しており、北斎の挿絵師として活動は、本稿のような数多くの版本の比較によって、より深められるものであろう。諸本・伝本の調査を経た綿密な研究は、これまで日本人の研究者が行ないこそすれ、海外の研究者にはあまり事例がなかった。しかし、最近の傾向としては、むしろ海外の研究者に、こうした手法を用いる例が、現れは始めている。日本研究において、対象にも、手法にも、国境が消滅しつつある。これも、文化資源デジタル・アーカイブの効用と言えよう。このような研究が、外国語で書かれ、日本人の研究者の目に触れないままとなることを憂い、著者の快諾を得て、翻訳を試みたものである。

なお、翻訳にあたり、立命館大学衣笠研究機構鈴木桂子教授、立命館大学大学院博士後期課程・川内育子氏の協力を頂戴した。記して謝意を申し上げる。